

大
城
立
裕

神
[のろ] 女



神
[のろ]
女

大城立裕

筑摩書房

著者紹介

大城立裕（おおしろ たつひろ）
一九二五年沖縄県生まれ。作家。
現在、沖縄県立博物館館長。『新沖
縄文学』四号発表の「カクテル・
パーティー」が六七年第五十七回
芥川賞受賞。『小説琉球処分』『対
馬丸』『般若心経入門』他。

神（のろ）女

◎大城立裕
一九八五

一九八五年九月二〇日第一刷発行

著者 大城立裕

発行者 布川角左衛門

印刷 多田印刷

製本 和田製本

発行所 筑摩書房

東京 神田小川町二ノ八
振替 東京六一四一二三
元一七五（営業）
電話 東京 二四一七二（編集）

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

神
の
ろ
女

序 章

海が光っている。月もないのに、海が一面にきらめいている。無数の光がはじかれて、天の闇に吸いこまれる。その先に天と海との裂けめが、昼間は溶けあうようにぼやけているのに、この夜なか、珍しくはつきりと見える。あの一点に私は生まれた。それがいま分った。そこまで、このカペール御嶽がつづいて見えるのだ。蒲葵もマーニもユーナもガジマルも、何の草木も見えないのに、そこは一面にカペールに違いないのだ。その証拠に、私はそこを一直線に渡ってきたのだ。白い体毛、白い鬚を闇のなかに走らせながら、無限の海原を走ってきた。ふりかえると、海が光っていた。珊瑚礁の干瀬だけを黒く一筋のこして、あの海面一杯の光の粉は、私が撒き散らしたのだろうか。きっとそうに違いない。光る海を走ってきて、珊瑚礁のかさなりに蹄をかけ

て這いあがり、カベールの草地に躍り入ったとき、私を迎えてカベールの草も木もいつせいに風をたてはじめた。風は私の鬣をゆるがせ、やがて天高く舞いあがらせてはおとし、時としてゆるやかに私のまわりを吹きめぐる。風はめぐって渦となり、それがさらに草木をゆるがせ、島をめぐって海へ渡り、天と海との裂けめまで吹き渡ったかと思うと、いつのまにかまた私を巻いてゐるのだ。

私は得意だ。カベール——神の庭には私だけがいる。世界一美しい私のからだだが、すつくとカベールの間に立っている。なぜか私は馬なのだ。白い馬なのだ。それは、たぶんあの天と海との裂けめに生まれたからだろう。誇らかに嘶いいて私は待つ。三度嘶いいたとき、あの裂けめに彼があらわれた。不思議だ。あんなに無限ともいえるほど遠いのに、眼鼻立ちも四肢もはっきりと見えるのだ。私と同じく白い体毛がびっしりと力づよい体を覆って、キラキラと光をはじきかえし、まるでその光を追いかけるように、四肢をおよがせて駆けてくる。その道がめだって光る。あの天と海との裂けめの彼方の、神の生れた場所から、この神のましますカベールにかけて、一直線に光っている。その光る道の無限の長さを、白く光る馬はこの上もない早さで駆けてくる。足も早い。道も長い。私はそれを待っている。私をめぐって走ってくるその足の律動にあわせて、私の体内の血が脈々とかけめぐる。かけめぐりながら熱くなっていく。あの力づよい体が、この私のしなやかな体を抱きに来る。かがやく眼まなこ、躍る四肢、なびく鬣、波うつ筋肉、すべては私のそ

れらに溶けあい、からまりあうために、やってくる。

海の光る道は遠いようで近い。近いようで遠い。彼はいつまでも着かないようにでいて、もうすぐその干瀬の近くに見えたりする。すぐそこに、もう手が届くように見えながら、無限の距離がひらいている。それでも息づかいは聞えるのだ。その息づかいは、潮騒とともにほろかな天の彼方まで届く。それを彼は誇っている。ね、聞えるだろうと、私に囁いている。その囁きを、はるかに投げてよこす。その囁きを追うように、駆けてくる。

へああ、はやく！

風が吹きまくる。草がなびく。

彼は嵐のように私を抱く。後趾あとあしを立て、蹄ひづめを大地に突きさし、前趾で私の胸を抱いて背を反らし、その太陽が私に攻めいる。私の月は迎えて攻める。攻めあえば、夜は昼となり、夜もなく昼もなく、天に太陽と月が同時にうかんで輝く。海の無数の光の粉たちは、風となって吹きあがり、天でふたたび光と化して氾濫し、

へクニカサよ！

と彼が呼べば、私はこたえて、

へテダオソイよ！

二人の叫びが呼応して舞いあがり、風となって太陽と月を巻けば、カペールいっぱい光が満

ちて、二人をなおも燃えあがらせる。

からだのなかに海鳴りがする。彼から私へ潮が流れ、私はそれを湛えて戦^{おの}き、戦く声が全世界をよびこみ、からだはその重みに耐える。潮は私のからだをめぐって突き抜け、光の道を沖へ沖へと渡っていつて、天と海とのあの裂けめに達してもなお流れすすみ、果てのない、光と闇との交錯する宇宙へ昇り、神へ何事かを訴えたともえたが、その瞬間私のからだに戻っている。私のからだは滾^{たぎ}る。さらに潮は無限に流れて世界は無限に重みをまし、太陽と月との光がたたかいあう。

〈世界が……〉

〈滅ぶ……〉

風が、ふと絶える。死んだのか。

カペールが融けて海へ流れこみ、蒲^く葵^ばもマーニもユーナもガジマルも、光る海の上に無数に立ち、私はうっとりとしてそれを眺める。私はどこに居るのか。闇のような光のような空間に身をよこたえて、うすぼんやりと時間を耐える。テダオソイは、その光るからだを再び海の道へ戻して、沖をめざす。

テダオソイは太陽^{てだ}にして襲^{おそ}う（治める）者——王者だ。国の王者のたましいが、いまだこへ行くのか。

へそこは死の道！

私は叫ぶが声にならず、その声を殺したのは太陽で、世界はもう真昼。太陽は私の声を殺しながら、みずからはものうく、宇宙にうかんでいるだけである。

第一章

砂浜を素足でふみつけて、金丸は歩きつづける。海風が単衣の裾をはためかせるのを押えもせず、髪はほつれるにまかせて、歩きつづける。暁のうす闇のなかで、はやくも野良へ出る百姓たちが、ていねいに腰を折って挨拶するのへ、あるかなきかほどの会釈を返し、指先で口髭をなで、また歩きつづける。朝日は津堅島と久高島のあいだで、天と海との裂けめを押し割るようになって、昇ってきた。海の色がみるうちに変わっていく。闇の色から藍青へ。やがて藍青が群青へと交錯してゆらめくと、そこへ朝日が血の色でさしつらぬいてくる。太陽から金丸へ、その色はまっすぐに射てくる。銀の簪がきらめく。日が昇りきってその血の色が消える頃までに、長い砂浜を幾往復することだろう。内間村の屋敷から浜へ出て、まず北の伊集村の浜まで行き、戻っ

て内間の浜をすぎ、さらに南へ兼久の浜まで歩く。そこで引き返して、また伊集まで。砂浜の白さは暁のなかでしだいに鮮かさをましてくる。朝日がじゅうぶんに昇りきる時分には、夏らしい熱気が満ちる。しだいに砂が灼けてくる。足裏にそれをしっかりと意識しながら、意識することを目的とするかのように、歩きつづける。はじめのうちはむしろ緩い足どりで、それをしだいに早める。距離と時間をかさねるほどに、しだいに足どりを落すのではなく、むしろ早めていく。苦しい修業に似ている。はじめてからもう半年たった。御物城御鎖側の職を辞してからのものである。琉球王国の貿易長官ともいうべき要職を突然捨てて、一介の僻村の地頭に戻ると、この間稽古をさっそくはじめた。もちろん思うところあつてのことである。閑つぶしに見えて、そうではない。

歩いて行く左手の先、南に海をこえて島尻の稜線がかんで見える。あの一角に佐敷の月城がある。約四十年前に、あの地に天下統一が兆すと誰が予測し得たろうか。その頃までに天下は沖縄島の群小の按司（豪族）が三つの支配圏に絞られ、それぞれが大明国と交易して彼の国から琉球国の北山、中山、南山とよばれるようになっていた。月城城主の巴志は、まず中山を取って父の思紹を王位につかしめ、明国皇帝から「尚」姓を賜わった。琉球国での姓氏のはじまりである。やがて中山の都を浦添から首里に移して、北山、南山を滅ぼし天下を統一して尚氏王朝を確立した。巴志は第二代をついだ。日本国は室町幕府の応永二十八年、大明国は成祖の永楽十九年のこ

とだ。

金丸はまだ幼く、北西の海にうかぶ小さな伊是名島で牛馬と戯れる少年にすぎなかった。青年になって妻と幼い息子をひきずるようにして島をとびだし、対岸の沖縄島山原地方の宜名真村に渡ったときも、まだ天下の政治の形勢をよくは知らなかった。首里まで上れば何かが待っていると思ったから、とにかく南へ走った。そのころ尚巴志を理想としはじめたように思う。天下を常に見つめるようになった。

首里で越来王子尚泰久とめぐりあえたのは好運であった。金丸は家人としてしだいに重用された。尚泰久は先王尚巴志の第七子で、表立った権力はもっていなかったが、国王尚思達の叔父にあたり、裏の力をもっていた。三年後に金丸を推薦して、百浦添（王府）に勤めさせた。かたわら金丸が仕えた年に誕生した嗣子尚徳の指導を託するようになった。それからまもなく尚泰久が王位に即いたのは奇貨であった。

奇貨というが、尚泰久と金丸が謀ったといえないこともない。金丸が尚泰久に仕えて十三年目、金丸は三十六歳になっていた。国王は尚思達から尚泰久の兄の尚金福に替っていたが、その尚金福が薨じたときが機会であった。機会といっても尚泰久が王位を望む意思表示をしたわけではない。表では王子の志魯と泰久の兄の布里とで王位を争った。この肉親同士の確執はながく、競合はかねてから予想されていた。そのことを尚泰久と金丸とは会うごとに話題にし、そういうとき

尚泰久はあからさまに志魯を王者として暗愚にすぎると評し、布里を野心家にすぎると評した。これらの評を金丸は折りにふれて志魯と布里とに会って伝えた。もちろん含むところあつてのことだ。これが両者の争いをいよいよ促したといえる。尚泰久と金丸とは、ともに野心を語りあうことはなかったが、たがいに心は通じあつていた。ある日、布里と志魯とが血刀をもつて争い、布里が志魯を殺したあと、金丸はただちに布里を逆賊よばわりして誅した。金丸に咎めはなかった。王位が尚泰久に落ちたからである。咎めどころか、金丸は首里を北へ二里はなれた西原間切内間村に領地を賜わった。領主とはなつたが、住居は首里にとどまつた。金丸は尚泰久にとつてなくてはならない側近であつた。天下は、尚巴志が一応の平定をなしとげはしたもの、まだ不穩の気配が消えてはいなかった。その対策のためにも金丸は尚泰久にとつて必要であつた。その後の最も大きな戦は、中城城の護佐丸と勝連城の阿麻和利とのそれであつて、この両雄をとものに斃すために金丸はひそかに大きく働いた。尚泰久にとつて護佐丸は岳父であり、阿麻和利は女婿であつたから、人情として難しいものを含んではいたが、ついになしとげた。天下の平定のためには必要であつたと、二人は慰めあつた。この前後、尚泰久は多くの仏刹を建立した。殺戮の罪を償うためであつたようだが、そのことのためにも金丸は働いた。

さらに、国の財を富ましめることを考えなければならなかつた。御物城御鎖側を拝命したとき、金丸は四十五歳になつてゐた。那覇港内にうかんだ小さな島に御物城はある。琉球国が大明国、

朝鮮、シャム、マラッカなどと交易、国交を通じてから八十年になるが、その間に建てられた公倉である。その長官になった金丸は、昇るところまで昇ったといえる。しかも実際の権力はそれのみにとどまらない。商都那覇の総奉行にひとしい。また那覇の一角に久米村があつて、そこでは明国からの渡来人の子孫が唐榮とうえいと称して繁榮し、明国と琉球国との外交の仲介役になっているが、その久米村へも支配力が及んだ。明国へ派遣される使節の人事を金丸が掌握したからである。尚泰久は、それから三年目に嗣子尚徳を金丸に託して薨じた。尚徳は跡を襲つて即位したが、そのとき二十一歳、金丸は四十八歳であつた。金丸の運が、このときから旋回しはじめた。金丸は尚徳の誕生いろいろの側近であつたが、それがむしろ仇になつたようなものであつた。

尚徳の行動が金丸には常に不可解で、氣になつてならなかつた。幼い頃から行動が奔放にすぎた。館から供を連れずに姿をくらましたかと思うと、家臣たちが探しくたびれた頃、矢で仕留めた野兎をさげて帰つて来たりした。豚の屠殺が好きで、百姓の村を歩きまわつてその準備をしているのを見つけると、包丁を奪いとつてみずから切り裂く。それが十歳をいくらか越えない頃で、人殺しを好むようになるのはいつのことかと、側近たちは噂いた。武芸が好きなのはよいが、稽古相手の側近は、その真剣勝負のような手荒さに辟易した。父の尚泰久がそういう息子を見てひと知れず後事を憂えている様子は、金丸にも察しがついた。

予感であつたといふべきか。尚徳は王位についてから、政治について金丸と方針を異にした。

金丸から見ては政治といえるものではない。天下統一と称して近隣の島々へ戦をしかけることを好んだ。宮古、八重山、大島まで遠征をしようというのを、金丸が抑えているところだ。島々への遠征よりも内政を整えるのが急務だと、金丸は考えている。天下の平定にしても、沖縄島でまだ仕事は残っているはずだ。護佐丸や阿麻和利を滅ぼしたからそれで片づいたともいえない。そのためにもまた、財を蓄えることだ。外国との交易をもっと盛んにしなければならぬ。そう考へて、マラッカとの交易をはじめ、尚徳即位の三年目にその第一船を派遣した。このマラッカへの遣使をめぐって、尚徳と金丸とは揉めた。朝鮮へ派遣しよう和尚徳は主張したが、金丸は押し切ってマラッカに決めた。尚徳は朝鮮を選ぶ理由を言わないが、金丸は朝鮮からの益はもはや頭打ちだと考えていた。マラッカは新開拓であった。冒険だが自信はあった。それでマラッカに決めると、尚徳はこんどは交易船に乗ってマラッカへ行きたいと言いだした。王者の言うべきことではなかった。つまり、金丸は国の財を考えているが、尚徳が何を考えているか、金丸には見当がつかない。このような帝王は滅びるべきだ。——と考えると、自分が若いころから尚巴志を夢みた野望を思いおこすことがある。

ただ、謀叛をおこすべき時期ではまだない。大義名分がまだ弱い。

金丸は冠を挂けた。御物城御鎖側を九年つとめたあとであった。尚徳はひきとめなかった。御物城などどうでもよいという顔であった。金丸の後任に凡庸な者をあてた。金丸は黙って内間に